

## 5 発症後 17 年目に抗胸腺リンパ球グロブリン療法が奏効した重症再生不良性貧血の免疫学的特徴と問題点

関 義信・大塚 富雄・小池 正\*  
鳥羽 健\*\*・布施 一郎\*\*  
相澤 義房\*\*・石山 謙\*\*\*  
中尾 眞二\*\*\*

新潟県立新発田病院内科  
長岡赤十字病院内科\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
血液分野 (第一内科)\*\*  
金沢大学大学院医学系研究科細胞  
移植学講座 (第三内科)\*\*\*

【緒言】発症後 17 年目に ATG 療法を行い G-CSF と輸血が不要となったなど良好な経過をとっている症例の免疫学的特徴と問題点を検討した。

【症例】症例は 23 歳女性。7 歳時より重症 AA と診断され、骨髄移植を念頭に置かれ治療されていた。サイクロスポリン A (CsA) 注射の副作用とドナー不在で、最近では G-CSF, CsA 内服液、月 2 - 4 単位の赤血球輸血で治療されていた。ATG 投与直前の血液学的所見は、PB: WBC 2600, RBC 182, Hb 6.9, Plt 1.4 と汎血球減少, BM: NCC  $13.8 \times 10^4/\text{microl}$ , M/gk 15, M/E 1.53, lym 16 % で造血細胞は比較的良好に保たれていた。ATG (900mg  $\times$  5 日) 療法終了時から約 1 年 3 月後まで、CsA 内服のみで G-CSF, 赤血球および血小板輸血は不要となっている。患者末梢血では 0.07 % の PNH 赤血球と 0.09 % の PNH 顆粒球を認めた。HLA-DRB1 検索では HLA-DRB1 \* 1501 を有していた。

【考察, 結論】発症後長期間を経過しているながら ATG が奏効した要因として HLA-DRB1 \* 1501 アレルを有していたことと多クローン性造血であったことが考えられた。しかし ATG 後の CsA 内服は中止出来ておらず、ATG の長期効果なのか CsA 依存性症例なのかさらなる長期的な観察が必要と思われた。

## 6 新潟県立がんセンター小児科における同種造血幹細胞移植成績

高地 貴行・浅見 恵子・小川 淳  
渡辺 輝浩

新潟県立がんセンター新潟病院小児科

【背景】近年、小児悪性腫瘍の治療は骨髄移植などにより約 60 % は治癒するようになった。これにより長期生存患者数が増加し、それに伴い晩期障害が明らかとなりつつある。小児領域では、化学療法における晩期障害は約 19 % との報告はあるが、造血幹細胞移植における晩期障害についてはまとまった報告は少ない。

【対象】1989 年 11 月から 2000 年 12 月までの 11 年間に当科で同種造血幹細胞移植を行った 51 症例のうち、移植後 2 年以上生存している 23 例を対象に、晩期障害について検討した。

【結果】晩期障害は 23 例中 22 例 (95.6 %) と高率に認められた。その内訳は脱毛, 低身長, 二次性徴遅延, 皮膚障害, 筋拘縮, 2 次がんなどである。これらのうち脱毛は全体の 60 % にみられたが、ブスルファン使用例では 100 % に認められた。二次性徴遅延は早期のホルモン検索などによる補充療法に必要性が示唆され、また男児例で無精子症の検索が今後の課題と示唆された。身長は 30 % の症例で - 2SD に達せず、前処置は全例 TBI であった。また 1 例に移植後 3 年という早期に二次がんとしての舌癌が発症し、慢性 GVHD に対する長期免疫抑制剤投与もその一因と考えられた。

【考察】晩期障害は今後増加すると予測される長期生存例において解決しなければならない問題であり、その予防措置を早期に行う必要がある。

## II. 特別講演

### 「同種免疫による白血病再発の治療」

金沢大学大学院医学系研究科  
機能再生学 細胞移植学

中尾 眞二